

受験番号

答えは、解答用紙に書きなさい。また、字数制限のあるものは句読点・記号もふくむものとします。

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文には、省いた部分があります。)

私の家の近くの駐車場に、「ここはユニバーサルデザインの駐車場です」という看板が出ています。この前を通るたびに、私は、この駐車場が「ユニバーサルデザイン」というデザイン会社の専用駐車場で、関係者以外は駐車しないようにaケイコクする看板だと思っていました。

( A ) あるとき、この看板の隅に「〇〇公社」という、東京都の関連団体を思わせる名称が出ていることに気づきました。どうも、ここが駐車場の持ち主のようです。ということは、「ユニバーサルデザイン」というのは……。

ここでハタと気づきました。この「ユニバーサルデザイン」というのは、企業名ではなく、一般名詞だったので。

そもそもユニバーサルデザインとは、「デザイン」という意味です。

( B ) シャンプーとリンスの容器は、同じ形状です。目の不自由な人にとっては、容器を手にとっても、区別が付きません。そこで、片方の容器の上部に凹凸をつけ、手に取っただけで、これがシャンプーかリンスか、わかるようになっていきます。こうした配慮があれば、目の不自由な人以外でも、使い勝手がよくなります。髪を洗うときには目をつぶっていることが多く、手の感触に頼ることが多いからです。

( C ) この駐車場の看板は、「自動車の運転が不得手で、縦列駐車や車庫入れなどが苦手な人でも駐車しやすいように、ゆったりとしたスペースをとっていますから、どなたでも安心して利用できます。車椅子の人も、自動車のドアをいっばいに開くスペースがありますよ」という意味でした。

誰でも利用できる公共駐車場なのに、「ユニバーサルデザイン」という専門用語を使ったことで、一般の人が誤解し、利用者数が少ない状態が続いていたのです。

看板を掲示した人は、この看板で利用が増えるだろうと考えていたかもしれませんが、実際には、かえって利用者を減らす効果しかなかったのだらうと思います。

こんな例を見ると、私は、「わかりやすい説明」というのは、むしろかしいものだなあと思うのです。

ひとりよがりの説明に陥らず、相手の立場に立った説明。それこそが必要なのに、bナマハンカな専門家は、知っている単語を駆使して、関係者しか理解できない説明文を書いてしまいます。

その結果が、こうした誤解されかねない看板だったり、読者が理解できない新聞記事だったり、テレビやラジオでの意味不明のニュース解説であつたりするのです。(略)

政治でも行政でも、あるいは企業であつても、いまほど説明責任(アカウントビリティ)が求められる時代はありません。「わかりやすく伝える」というのは、いまやなくてはならない現代人の必須能力です。あなたには、その能力が備わっているでしょうか。(略)

国際情勢に関する研究者の発表会に参加したときのことです。会場に発表資料が配布されました。担当者が発表を始めるのですが、ひたすら配布資料を読み上げていきます。私は、次第に腹立たしくなってきました。「資料は見ればわかるだろう。ここはcロウドク会ではないんだから、資料をdホソクする説明をしてくれよ」と、心の中で叫んでいました。

発表会の長かったこと。資料を読み終えた若き研究者は、ほっとした顔をしていましたが、それ以上に①ほっとしたのは、会場で「読み聞かせ」を受けていた人たちでした。(略)

私が、「視聴者にとつてのわかりやすさ」について自覚し、真剣に試行錯誤を始めたのは、六年間の地方勤務を経て、東京の報道局社会部に移ってからです。

それは、現場リポートで話すようになったのが、きっかけでした。

一九七〇年代半ば、磯村尚徳氏が「ニュースセンター9時」にキャスターとして登場、記者が初めてキャスターになったと話題になった頃でした。その頃NHKでは、アナウンサーが原稿を読むだけでなく、現場に行った記者もしゃべればいいじゃないかということ

受験番号

になってきていたのです。私も、しばしば、事件現場から中継を担当するようになりました。

現場レポートは、内容にもよりますが、四〇秒から一分ないし一分半程度です。記者は、現場でレポート原稿を書き、それを自分で読みます。

この現場レポートには、意外な落とし穴があります。

②たとえば列車事故が起きたとします。

東京のスタジオでアナウンサーが「きょう午前、〇〇線のどこそこで脱線転覆事故があり、五人が大けがをしました。では、現場の〇〇記者に伝えてもらいましょう」と現場に呼びかけます。

すると、現場にいる記者が、「はい、きょう午前何時何分ごろ、〇〇県××市の〇〇線で……」と話し出す。よくあることですね。でもこれは、あきらかによくないレポート例です。視聴者は、事故現場がどうなっているのか、現場中継ですぐに見たいのです。それなのに、「きょう午前……」と始まりますと、視聴者は、「そんなことより、いまだどうなっているんだ」とテレビの前で突っ込みを入れたくなります。

どうしてこのような失敗をしてしまうのでしょうか？

それは③(承)結を考えてしまうからです。

視聴者はすでに脱線転覆事故があったことを知っています。知りたいのは、リポーターがどこにいるのか、現場はどうなっているのか、ということですから、「こういうところですよ」という説明から始めなければいけません。

それが、第1章で述べた、「話の地図」の現在地をまず指し示す方法です。東京のスタジオでアナウンサーがすでにニュースのリードを読んでいきますから、視聴者に「地図」は示されているのです。「地図」は渡されているのですから、「その地図の中のここですよ」と指し示すレポートをすればいいのです。

たとえば、記者が画面に顔を出して、こう始めます。

「事故が起きてから三時間たった現場です」

「三時間たった現場」と始めることで、視聴者は、「事故の直後ではないのだ。三時間たっているということ、けが人は救急車で運ばれた後だな。復旧作業が始まっているのかな……」と考えることができます。時間経過の「現在地」がわかるのです。

次に「ご覧のように後ろには……」と続け、カメラは事故現場にズームアップします。

これで、事故現場と話し手の位置関係がわかります。見ている人も安心するのです。リポーターの顔からボンと列車事故の現場に切り替わったのでは、リポーターはどこでしゃべっていたのかな、と疑問を抱いてしまいます。リポーターが、本当に現場にいるか疑ってしまいかもありません。そうになると、見ていて不満、あるいはわかりにくいという印象を与えてしまうのです。

リポーターと現場の位置関係を映像で説明することで、文字通りの「現在地」がわかるのです。

これも、「視聴者に地図を与える」工夫の一つです。

もし、日が暮れて真つ暗なら、「後ろにライトが当たっています。あそこが現場です。」などという表現で、自分と現場の位置関係をまずわかってもらいます。視聴者は頭の中に現場のおおまかな見取り図を描くことができ、「ははあ、ここからなのだ」と安心できます。

次に「いま〇〇が起きています」。その話をしてから、この事故が起きたのはきょうの午前何時ごろでこうだったよとつなげていけば、「現在地」がわかった後ですから、落ち着いて聞くことができます。

つまり、東京のスタジオで「地図」を示し、現場の記者が「現在地はここです」(現場はこうなっています)と示します。そのうえで、おもむろに事故発生時の話に戻ります。いわば「地図」の入り口を示すのです。(池上彰『わかりやすく伝える技術』)

注 第1章で述べた：本文より前の第1章で、筆者は、「あらかじめ『いまからこういう話をしますよ』と聞き手にリードを伝えることを、私は『話の「地図」を渡す』と呼んでいます」と述べています。「リード」とは、これから話すことをまとめたもの。

受験番号

問一 ー線 a k d のカタカナを、漢字に直しなさい。

問二 空らん A k C に入る、最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません。)

ア つまり イ なぜなら ウ それとも エ たとえば オ ところが

問三 空らん X にはどのようなことばが入りますか。本文中のことばを十〜十五字でぬき出し、X にあてはまる形に直して、答えなさい。

問四 ー線①「ほっとした」とありますが、このとき筆者が「ほっとした」理由を、次のように説明しました。(ア)に入る

十字以内のことばを、本文の表現を使って答え、(イ)に入る五字以内のことばを、自分で考えて答えなさい。

(ア) だけの、(イ) な発表会が終わったから。

問五 ー線②「たとえば列車事故が起きたとします」とありますが、「列車事故」をレポートする時、筆者が正しいと考える順番に次の内容を並べ、記号で答えなさい。

ア リポーターが事故発生時の様子を説明する。

イ リポーターが時間経過の「現在地」や現場との位置関係の説明をする。

ウ アナウンサーが大まかな事故の説明をする。

エ リポーターが事故現場で「いま」何が起きているのかを説明する。

問六 ー線③の四字熟語の、( ) に入る漢字を、それぞれ答えなさい。また、次の四字熟語の( ) に入る漢字を、下の意味を参考にして、答えなさい。

1 ( ) 我 ( ) 中 ……心をうばわれ、自分を忘れ、ひたすら熱中すること。

2 ( ) ( ) 応変 ……その場の情勢の変化に対応して、適切な処置を行うこと。

問七 筆者が現代人に必要な能力だと述べているのは、どのような能力ですか。次の ( ) に入ることばを、本文から二十〜二十五字でぬき出して、答えなさい。

( ) をする能力。

問八 本文の内容として、正しいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ユニバーサルデザイン」という看板を出した人は、利用者が増えると考えていたが、公共の駐車場なのに専門用語を使ったことで、特定の団体の駐車場に誤解されるなどして、利用者を減らすこととなったと、筆者は考えている。

イ シャンプーとリンスの容器は同じ形状であるが、容器の上部に凹凸をつけると、容器を手にとってでも区別がつかない目の自由な方や、目をつぶって使うことの多いお年寄りに限って、使い勝手がよくなると筆者は考えている。

ウ 現場レポートは四〇秒から一分ないし一分半程度であり、現場でレポート原稿を書き自分で読むものだが、現場中継では、現場がどうなっているのかを視聴者は見たいということを考えてレポートすべきだと、筆者は考えている。

エ 看板や新聞記事、テレビやラジオのニュースは、理解できなかつたり意味不明であつたりして、必ず誤解を受けるものであるので、政治や行政、企業には説明責任(アカウンタビリティ)が求められると、筆者は述べている。

オ 一九七〇年代半ば、記者が初めてキャスターになったことが話題になった頃、筆者は六年間の地方勤務をする中で、しばしば事件現場から中継を担当するようになり、視聴者について真剣に考え始めるようになったと、筆者は述べている。

受験番号

(二) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文中では、方言が使われていて、一部表現を改めたところや省いた部分があります。また、本文に登場する麻子と保は、姉弟です。)

麻子がむちゆうでページをくついていると、窓から保が泥だらけの顔をつきだして呼んだ。

「おい、あこちゃん、早く来いってば。勇ちゃんとあんちゃんが、あざらしのこっこつかまえて池につないでるんだよう」

「あざらしって、なにさ」

麻子は顔をちよつとあげただけで、また、小説を読みはじめた。保のいうことなど信用はできないのだ。

「あざらしがどうして池にいるの」

「あこちゃん、昨日、川さ行ったべ。志尾さんと、馬つれて川さ行って、そのとき、へんなもの見たっていったべさ。あれ、あざらしだったんだってば。勇ちゃんとあんちゃんと茂政さんと三人してつかまえたんだって。魚屋の池んとこに、今、つないでるんだよ。見にごねえならいいさ。おれ、佐伯さんちにもしよんちゃんちにも知らせないで、いちばんに教えてやったんだぞ」

保がどなつてかけていくのを見ると、うそだとも思えなかった。昨日、麻子も志尾さんも川で、たしかに波間を泳ぐ黒い頭を見たのだ。

あれ、あれと、声にだすうちに、すぐ波にかくれて見えなくなった。犬かと思っただけで、ひよつとするとあれがあざらしだったのだろうか。どうして確かめなかったのだろう。麻子は残念で、①靴をはくのもどかしく橋の向こうの勇の家へかけていった。勇の家は橋から十軒目ばかり向こうの魚屋で、aウラテにひょうたん形の小さな池があった。

池のまわりにはもう子どもたちがびっしりあざらしをとりかこんでいた。

注<sup>3</sup> 「めんこいね、勇ちゃん。これ、まだ、こっこでねえか。なして川さのぼつてきたんだべ」

「迷子になったんだべか」

子どもたちは口々にたずねた。あざらしは首に縄をかけられ、池の端の杭にしっかりと結びつけられていた。②あざらしの黒い毛皮は水をはじいて、みがいた鉄板のようにひかり、ひれのかたちをした前足には熊のように硬い爪がならんでいた。子どもたちに棒でつかれるたびに、いかにも不自由そうに体をくねらし、よたよたと地をはった。

「こっこや、ほら、顔見せろ」

勇の弟の忠が、得意そうに縄をぐいとひっぱった。あざらしは頭をあげ、鼻を鳴らしたかと思うといきなり池にとびこんだが、縄が短いので、がくと引きもどされたように首をあげた。

「今朝、魚釣るべと思つて川上さ行ったども、なんせ、ひどい霧だもな。川だか岸だか見分けつかねえんだ。その中で、水の音させてだれだかいるんだな。かわうそかと思つたらこいつだったわけだ」

あんちゃんの猛が説明し、勇がつけ加えた。

「霧が濃くて見えねえとこさもつてきて、はしこくてよ。つかまえるのに三人がかりだった。それでもこいつ、おれがハモニカ吹いてたの聞いてたんだべか。おれたちのそばに来てじつと見てみたいだよ」

「魚釣りにいつてハモニカ吹くなんて、はんかくさい」

注<sup>4</sup> と、喜八郎がわらつた。

「それでも、ハモニカであざらしのこっこ、つかまえるなんて、勇ちゃんだけあるな」

みんなはわらい、喜八郎はあざらしのきらきらひかる髭を見やった。(略)

あざらしは突然、首をあげて鼻を鳴らしたが、それは途中から③途方にくれたような吐息に変わった。ひれ足をぺたぺた動かし、腹をずつと立ちどまり、黒い大きな目で子どもたちを見あげた。どうして自分がここにいるのか、なぜ、ここでこんな目にあわなければならぬのかまったくわからないというようだった。石炭のようにまっ黒な目は、睫毛のないせい、ムボウビでむきだしな感じで、

受験番号

麻子はどぎまぎした。④恥はずかしさとなつかしさの入りまじった妙なまな気持ちだった。そんなはずはないのに、あざらしにいつか会ったことがあるような気がするのだ。

鼻のわきにびんとそった短い髭ひげが、あざらしを子どもらしくすこし⑤滑こ稽けいに見せていて、両頬りょうほおに向けてやわらかな弧こをかく長い髭がかすかにふるえている。

(あんだ、どこにいたの。どうして川をのぼってきたの)

たずねてもあざらしはもちろん答えない。麻子が氷の川の上をどこまでも行ってみたいと思ったり、忘れな草の野原や、木苺きいちじの丘おかをひとりで歩きたがるように、あざらしも、ただただ、子どもらしい好奇心で、川をのぼってきたのかもしれない。それは鱒ますや鮭さけたちのように、サンランという目的のためでは決していないのだったから……。

そうして、麻子はハモニカの音色にひかされて、濃い霧のたちこめる川べりに身をひそませていたという、あざらしがあんまりかわいくて、かわいそうだった。

「こいつ、どうしてだか魚やっても食わねえんだ。興奮してくたびれてるんだな」

猛まは、棒であざらしをつく子どもをしかりつけ、

「いいかげん見たら、みんな帰れや。こいつ落ち着かねえから」

と、追いはらうように手をふった。麻子は思わず、

「ねえ、まさか、おじさんたち、殺して売ったりしないよね」

たずねたつもりで声がかすれた。

「なにいうんだ、おまえ。殺すもんか。おれ、川さつれてついでいっしょに泳ぐんだ。とうさんがなにかいったら、こいつに魚とり教えて稼かせがしてやるっていうべ」

勇は濃い眉まゆをあげて、きっぱりいった。

「それでも、こいつ、あんまり追いまわして、つかまえたとき、怪我けがしたかもしれねえんだ。いやに元気なくなったべ。さあ、さあ、もう、みんな帰れ。明日でもあさつても見してやるからな」

勇や忠が子どもたちを追いはらい、みんなはがやがやと帰っていった。

「見たべき、あざらしのこっこ」

夜になつても、保は興奮していた。

「忠までいばつて、おれば追っぱらうんだよ。なして、昨日のうちに、おれたちがつかまえなかったんだべ。志尾さんだつてあこちゃんば馬うまにのせてたんだろ。そんなことしないで、あざらしとりしたほうがおもしろかったのに。志尾さんさ、もと、馴鹿とんかい射やったとか、ろっぺん鳥のたまごとったとかいってたけど、うそだべな。あんなのでたらめなの、よくわかったよ」

「だつたら、保ちゃんならつかまえたのかい」

と、友枝ともえがからかい、

「保ちゃんがあざらしを助けて、竜宮城りゅうきゅうじょうへ行こうとも思ってるんじゃないのかい」

かあさんがわらった。

「あいつ、まだ、こっこだからかわいそうだべ。大きかったらおれ、背中さのつてどこ行くかなあ。竜宮じゃないや。海豹島かいひょうとうさ行くかなあ」

「⑥それ見なさい、なにも知らないくせに。海豹島なんてね、名前は海豹でもほんとは、おつとせいばかりいるんだよ。拓たくにいさんたち見にいったときでも、波なみが荒あれて島に近づけなかったつて。保ちゃんなんかおつとせいじゃなくて、ええと、おつこちちやうだよ」と、麻子もわらった。

受験番号

けれど、わらいながら、あの黒くうるんだあざらしの子どもの目は、いつまでも麻子の心にやきついてはなれなかった。どうしても麻子の心にやきついてはなれなかった。どうしてなのだろう。麻子はふしぎだった。あの川のそそぎこむ海から、⑦ピロードのようにつややかなあざらしが訪ねてきたのは、いつも川のほとりで流れゆく海のことを思っている麻子に、会いにきてくれたような気がする。そうして、せっかく自分の前にすがたを見せてくれたのに、こちらはそれとも気づかずに男の子たちの手にわたってしまったとは、どう考えてもくやしかった。

あざらしの子はほんとうに勇になれて、いつしよに泳いだりするだろうか。正直のところ、つかまえたのが新三や喜八郎たちでなくてよかったと麻子は思う。勇ならひどくいじめはしないだろう。あざらしにハモニカを吹いたり、うたをうたってやったり、あそべたらしいなあと麻子は思った。

だが、あざらしの子はどうしたのか、日ましに元気がなくなっていった。勇はむろんのこと、保までが気にしていたが、あたえる魚もたべずにじっとしていることが多くなった。

そして、五日目の夜は、雨風の激しい夜であった。

雨がトタン屋根をたたき、樺の葉をたたき、風が窓をがたがたふるわせていた。その明け方、杭につないだ縄が切られ、あざらしのすがたは消えていたという。

「ゆうべ、池のほうでへんな音がしてたんだ。畜生、あるとき、どろぼうが盗んで逃げたんだ」

と勇はくやしがり、喜八郎も賛成した。

「見てろ、そいつはどこかで皮はいで、靴ば作ってはいてくるから。今度から新しいあざらし皮の靴見たら、気つけるよ、勇ちゃん」だが、なぜか、すぐになにごとでもしやべりたがる保は沈黙し、麻子は麻子で、あのあざらしが勇の小さな池で死ななかつたことにほっとしていた。

「あざらしは海でうまれたのなもの。やっぱり、海に帰りたくて、いっしょうけんめいで川まではっていったんだねえ」

かあさんと友枝は、うなずきあつた。

それまでだまっていた保は、急にわらいだした。

「それでも、海棲動物だつてむかしは陸にいたんだべ。くじらだつてそうだつて、にいさんがいったよ。そんなら、あべこべに、くじらが **X** を恋しがることだつてあるべさ。だから、あざらしだつて山へ来たかつたかもしれないべ。気が変わつてまた海へ帰つたんだべかな」

そして、突然、麻子は思いだしたのだ。あの雨風の夜に、合羽をかぶつた保が、こっそりどこからか帰ってきたのを。びしょぬれの合羽と泥だらけのズボンと、長靴についていた水草のことを……。

⑧麻子は息をとめ、まじまじと保の顔を見つめた。

(神沢 利子『流れのほとり』)

注1 あんちゃん：兄。 2 志尾さん：麻子の家の、馬の世話をする人。

3 めんこい：かわいらしい。 4 はんかくさい：ばからしい。あほらしい。

問一 線 a、b、c のカタカナを、漢字に直しなさい。

問二 本文中には「あざらし」が登場しますが、慣用句には動物を用いたものが多くあります。次の、動物を用いた慣用句の( )に入る動物名を、下の意味を参考にして、答えなさい。

ア ( ) の一声：有力者の言葉で議論がまとまること。

イ ( ) の子：大切にされていて手元からはなさないもの。

ウ ( ) の歩み：すすみ具合がおそいこと。

受験番号

問三——線①「靴をはくのもどかしく」とありますが、このときの麻子の心情として最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分がしていたかもしれない大発見であるから、一刻も早く自分の目で確認かくにんしたいと思っている。  
 イ 今となつては、自分が保の言葉を信用していることを、すぐにでも態度で示したいと思っている。  
 ウ こうしているうちにも、あざらしが逃げ出して再び波にかくれてしまつてはいけないと思っている。  
 エ ほかの子どもたちよりも早く池にかけつけて、勇たちの大発見を共有させてもらいたいいと思っている。  
 オ 早く、保が自分に対してほんとうのことを言っているのかどうか、確認したいいと思っている。

問四——線③「途方にくれた」⑤「滑稽」の本文での意味として最もふさわしいものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ③「途方にくれた」  
 ア おどろきのあまりことばを失った  
 イ あまりのことばがっかりした  
 ウ どうしようもないくらい緊張きんちやうした  
 エ どうしたらよいかわからなくなつた

⑤「滑稽」

- ア すべすべとして心地こころよいさま  
 イ おどけていておもしろいさま  
 ウ 情けなくてみじめであるさま  
 エ なんとも深い味わいがあるさま

問五——線④「恥ずかしさとなつかしさの入りまじつた妙な気持ち」とありますが、麻子のこの気持ちを次のように説明しました。次の文の( ) に入ることばを、(ア) は十五字で、(イ) は七字で、(ウ) は十字以内で、本文からぬき出して答えなさい。

麻子は、(ア) 目で素直すなおに真正面から見つめられて、恥ずかしく感じている。また、あざらしが(イ) に心を動かされたことから、あざらしには(ウ) があるように思えたために、自分に似通つたあざらしに、まるで知人であるかのような、なつかしさを感じている。

問六——線⑥「それ見なさい、なにも知らないくせに」とありますが、この表現にこめられた麻子の心情は、どのようなものだと読み取れますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア いつまでも幼くさわぐ弟が、あざらしの子の思いを何も理解していないことに内心失望を感じて、自分にしかあざらしの子の思いはわかつてやることができないと思う気持ち。  
 イ いつまでも興奮きんげんさめやらない弟にあきれつつも、幼いために的外れの発言をするところがかわいらしく、かわいそうなあざらしへの自分の思いを一時忘れてしまう気持ち。  
 ウ いつまでもあざらしに未練がある弟にいら立ちを感じ、彼かれがものを知らないということをやんわりと指摘してまして、なんとか弟のあざらしへの思いを絶たせようとする気持ち。

エ いつまでもあざらしにこだわり続ける弟をからかつて、年上らしくふるまつてみてはいるものの、内心では、自分もあざらしの子に対して、強い心残りがある気持ち。

オ 知つたかぶりをしている弟をひやかすことで、弟のあざらしに対する思いを絶たせて、内心では自分もいっしょに、あざらしのことなど忘れ去つてしまいたいと思つている気持ち。

受験番号

問七 — 線⑦「ビロードのようにつややかなあざらし」(ビロードは布の種類)とありますが、— 線②「あざらしの黒い毛皮は水をはじいて、みがいた鉄板のようにひかり、ひれのかたちをした前足には熊のように硬い爪がならんでいた」と比べると、麻子のあざらしに対する印象の変化を読み取ることができます。これについて説明したものと、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア どうもうなげものとしての印象から、放っておくことができないほど気高く、神々しい印象に変わった。  
 イ 冷たく、あたたかみのない存在としての印象から、自分一人をつつみこむような愛情に満ちている印象に変わった。  
 ウ どこか得体の知れない存在としての印象から、海が子どもたちにあたえた宝物としての、尊い印象に変わった。  
 エ ありふれてつまらない生きものとしての印象から、さわらずにはいられないほどめずらしい印象に変わった。  
 オ 力強く、あらあらしい生きものとしての印象から、なでたくなるような、やわらかくて優しい印象に変わった。

問八 本文からうかがえる「勇」の人柄として最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

- ア 他の子ども達に対してはばってばかりの態度をとってはいるが、幼い生き物に対しては優しい一面を持った人柄。  
 イ 他の子ども達からはおそれられているが、幼い生き物を前にするとロマンチストな一面がかいま見えるような人柄。  
 ウ 他の子ども達に対してきっぱりとした態度を取り、幼い生き物に対して、手あらなあつかいはしないような人柄。  
 エ 他の子ども達に対しても幼い生き物に対してもいばっているが、親に対しても強気で一步もゆずらないような人柄。  
 オ 他の子ども達に対しては優しいが、幼い生き物に対してはごうまん金もうけの道具としてしか見ないような人柄。

問九 空らんXに入る、最もふさわしいことばを、保のことばの中から探して答えなさい。

問十 — 線⑧について、次の問いに答えなさい。

1 「麻子は息をとめ」たとありますが、このときの麻子の心情を、次のように説明しました。(A)に入る内容を、自分で考えて、二十〜二十五字で答え、(B)に入る内容として、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

(A) ( ) ことに気がついたために、(B)。

- ア おどろいている    イ いらだっている    ウ 緊張している    エ なつかしんでいる    オ がまんしている

2 作者は、麻子がここで気づいた内容を、これ以前に、保のある行動を描くことで、あらかじめほめかしています。それはどのような様子ですか。最もふさわしいことばを、本文から二十字程度でぬき出しなさい。

